



東京都美術館
TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM



都美セレクション
グループ展 2018



都美セレクション グループ展 2018

Group
Show
of
Contemporary
Artists
2018



東京都美術館

都美セレクション グループ展 2018

会期：2018年6月9日(土)ー7月1日(日)

会場：東京都美術館 ギャラリーA、B、C

主催：東京都美術館（公益財団法人東京都歴史文化財団）、
各展覧会の実施グループ

Group Show of Contemporary Artists 2018

Period : June 9 (Sat) – July 1 (Sun), 2018

Venue : Gallery A, B, C

Organized by
Tokyo Metropolitan Art Museum
(Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture),
Executive committee

ごあいさつ

「都美セレクション グループ展」は、新しい発想によるアートを作り手の支援を目的とし、当館の展示空間だからこそ可能となる表現に挑むグループを募り、その企画を実施するものです。グループ展2018では、34件の応募企画の中から、書類審査とプレゼンテーション審査を経て、3グループが選抜されました。グループ展2018の展覧会について、審査委員講評と共にここにご報告します。

当館で実現したこれらの展覧会が、それぞれのグループの創作活動における更なる発展の一助となれば幸いです。また、展覧会の成果に様々な形でふれていただくことで、各グループの真摯な取り組みが、連鎖的反応の触媒となり、次の新しい思索や創作活動へとつながっていくことを期待しています。そして、今後いっそう、本企画が、従来の枠組みを越えた創作活動を実現する場として活用されることを願っています。

本展覧会を開催するにあたり、展覧会を主催されたグループの皆様をはじめ、ご協力いただいた関係各位に心より感謝の意を表します。

東京都美術館
(公益財団法人東京都歴史文化財団)

目次

p.08 **Quiet Dialogue：インビジブルな存在と私たち**
Quiet Dialogue: Invisible Existences and Us

p.23 「インビジブルな存在」を可視化するために
大谷省吾

p.24 **複数形の世界のはじまりに**
At the beginning of the plural world

p.39 「複数形の世界のはじまりに」展がもたらしたこと
野地耕一郎

p.40 **蝶の羽ばたき Time Difference 時差 vol.3**
New York-Seattle-London-Tokyo
Butterfly Flutter - Time Difference 時差 vol.3
New York-Seattle-London-Tokyo

p.55 彷徨う時空への新たな視線
笠嶋忠幸

p.56 「都美セレクション グループ展 2018」について
——多様な価値観とどう向き合うのか
山村仁志

p.58 展覧会実績



Group Show of Contemporary Artists 2018 都美セレクション グループ展 2018

凡例

出品作家のうち、グループの代表者名にはアンダーラインをつけた。

掲載図版の撮影は、坂田峰夫による。

ただし、*印をつけた東京都美術館によるもの、および特に明記のあるものを除く。

(左頁上) ギャラリーAでの展示風景

(左頁中) ギャラリーBでの展示風景

(左頁下) ギャラリーCでの展示風景

Quiet Dialogue: インビジブルな存在と私たち

Quiet Dialogue: Invisible Existences and Us

会場

ギャラリーA

—

グループ名

Back and Forth Collective

グループの公式サイト:

<https://backandforthcollective.wordpress.com/>

—

出品作家

小口なおみ / 川村麻純 / カタリナ・グルツェイ / 坂本夏海 /

滝朝子 / セナ・バショズ / 本間メイ / 良知暁

—

入場者数

6,658名

—

助成: 公益財団法人 朝日新聞文化財団、オーストリア文化フォーラム、Linz Kultur、
Kulturland Oberösterreich、Federal Chancellery of Austria、
The Japan Foundation, Jakarta

協力: つばめ倉建築設計

Back and Forth Collectiveは、リサーチを基にした制作を行うアーティストが中心となり、社会的なトピックと日常とのつながりに関心を持つメンバーとともに結成したコミュニティ。特定のスペースを持たず、その時々でプロジェクトを立ち上げ、興味関心を共にする人々とリサーチやディスカッション、実践を企画している。

グループによる展覧会紹介

社会的役割としての性別とは何か。その問いの根底を共有すべく、本展では過去現在を問わず異なる女性の在り方を考察した作品に焦点を当てる。

アーカイブやインタビュー、作家自身の経験などが織り交ぜられた作品群、観客との対話、知の共有に開かれたライブラリースペースを通じて、かつて女性の問題として語られてきた（そして、今もなお語られている）事象を再検討し、現在の社会における多様な個人や共同体がともに抱える問題を模索していく。

大文字の歴史において、見えない（インビジブルな）存在とも言える女性達の声や生き方を丁寧にみつめることで、慣習的な性別の社会的役割から変わりはじめている現在を考える契機になるだろう。インドネシア、オーストリア、トルコ、日本出身の作家がお互いに対話を重ね、作品やライブラリースペースを通してジェンダーに向き合った本展は、ここに集った様々な視点や意見を交換する場となったのではないだろうか。

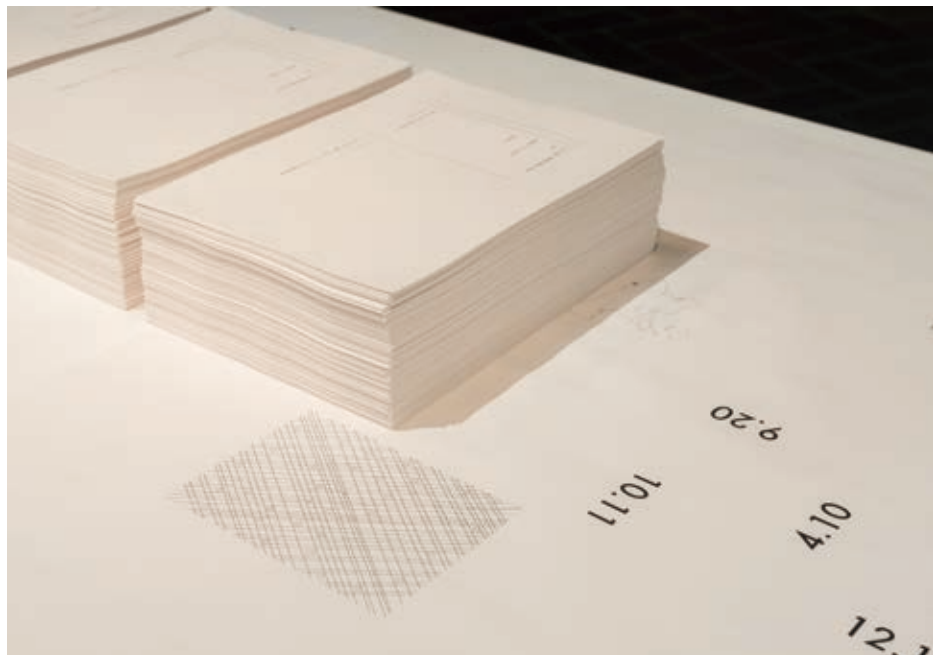




カタリナ・グルツェイ 《Metro Mir》



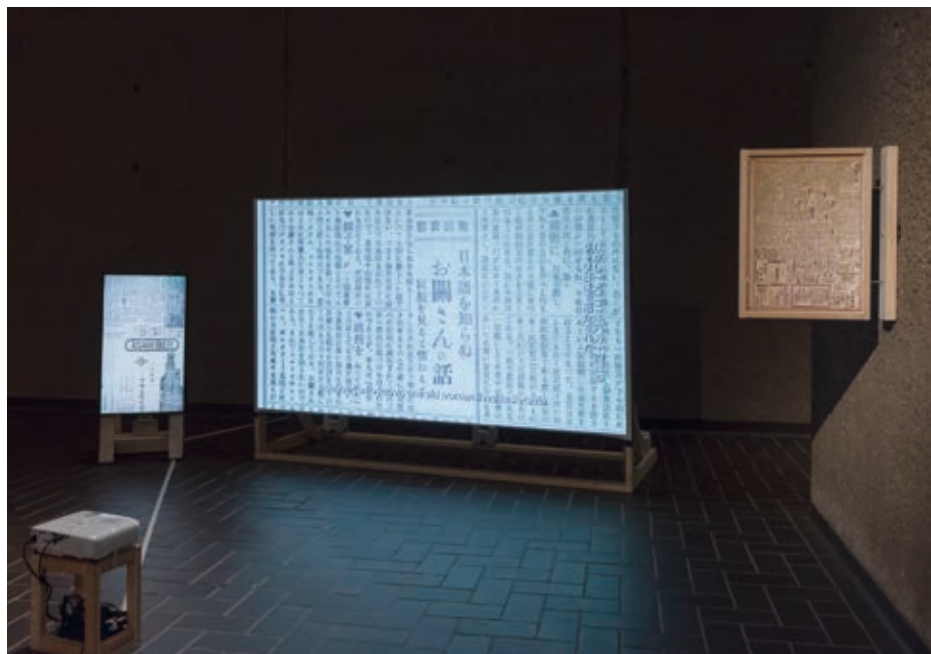
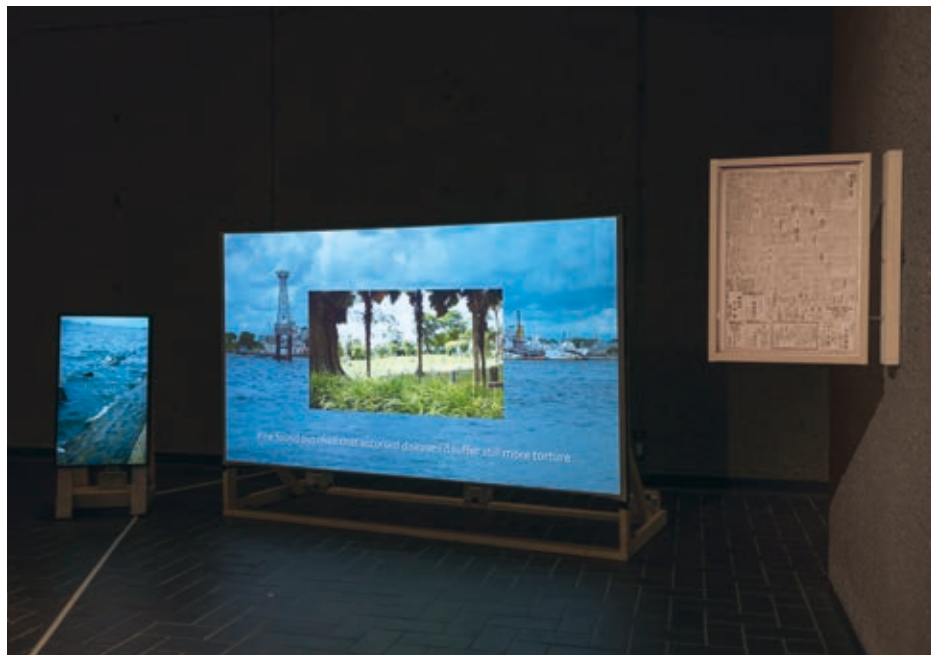
坂本夏海 《魔女にインタビュー》



良知暁 《ハロー／もしもし、受話器越しに聞こえた声》



川村麻純 《home/making》



本間メイ《Anak Anak Negeri Matahari Terbit - 日出ずる国の子どもたち-》

セナ・バショズ《Time Worm》



《ライブラリースペース》担当：小口なおみ、滝朝子



撮影：坂本夏海

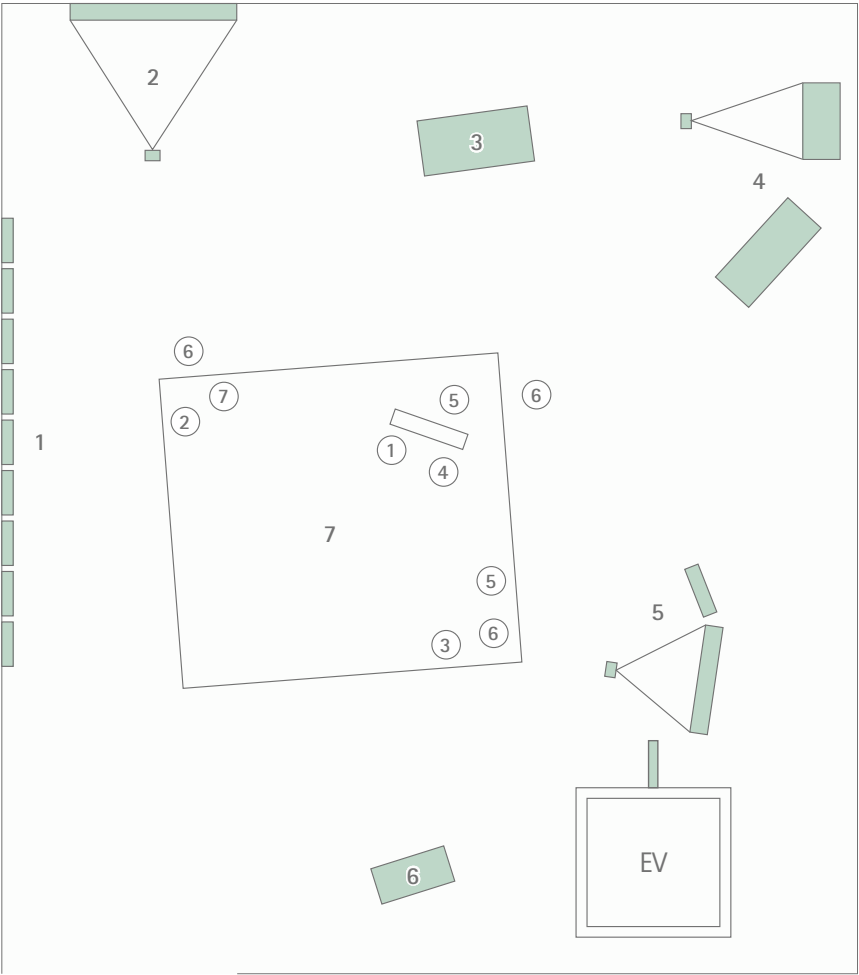


作品リスト

番号	作家	作品名	材質・素材など	制作年
1	カタリナ・グルツェイ	Metro Mir	C プリント 9点	2016-2017
2	坂本夏海	魔女にインタビュー	映像 (14'20")	2018
3	良知暁	ハロー／もしもし、受話器越しに聞こえた声	インスタレーション	2018
4	川村麻純	home/making	映像 (20'00") インスタレーション	2018
5	本間メイ	Anak Anak Negeri Matahari Terbit - 日出ずる国の子どもたち -	映像インスタレーション (28'16")	2018
6	セナ・バシヨズ	Time Worm	映像 (30'12")	2014
7-①	滝朝子	Untitled	音声 (1'49")	2018
7-②	小口なおみ	教育アニメのための断片的な物語 ～愛し、愛される悦びの分配～	クレイ5点、テキスト	2018
7-③	イルワン・アーメット & ティタ・サリナ	Salting the Sea	映像 (9'17")	2015
7-④	カタリナ・グルツェイ	Heimat	ポストカード2点	2008
7-⑤	ハイナン net		写真5点、アルバム3冊、 リーフレット	2017-2018
7-⑥	良知暁		ドローイング3点	2018
7-⑦	坂本夏海	魔女とのインタビュー記録	スケッチ、メモなど	2017-2018

7-①～⑦ ライブラリースペース 担当：小口なおみ、滝朝子

作品配置図



アーティストツミットアップ

日時：6月10日(日)14時00分～17時00分
場所：ギャラリーA 参加者数：50名



*

上映&トーク

日時：6月23日(土)14時00分～16時00分
場所：ギャラリーA 参加者数：55名



*

ガイドツアー

日時：6月29日(金)18時00分～19時30分
場所：ギャラリーA 参加者数：15名



*

内容：出展作家による作品解説や鑑賞者の参加によって対話が行われるワークショップ、女性に関する映像作品上映など計6つのイベントを開催。イベントゲストとしてインドネシアからイルワン・アーメット&ティタ・サリナを招聘し、出展作家の本間と共に上映とトークを行なった。また、出展作家のグルツェイとアーメット&サリナがそれぞれの作品背景や活動を紹介。異なる地域のジェンダーに関する歴史や現代における問題などを提示した。

フライデー・ダイアログ

日時：6月15日(金)18時30分～19時30分
場所：ギャラリーA 参加者数：4名



*

アーティストトーク

日時：6月24日(日)13時00分～15時00分
場所：ギャラリーA 参加者数：40名



*

クロージング・イベント

日時：7月1日(日)13時00分～14時00分
場所：ギャラリーA 参加者数：30名



*

「インビジブルな存在」を可視化するために

大谷省吾（東京国立近代美術館美術課長）

#MeTooの運動が昨年秋から広がっている。今まで声を上げるのでできなかった人たちに機会が生じたのはよいとして、それが一過性の流行で終わってしまってはならないだろう。SNSは爆発的な拡散力をもっているけれども、たちまち別の話題にとって代わられる。それに対して、アートがアートならではのやり方でできることは何だろう。そんなことを考えさせられた展覧会である。

この展覧会はジェンダーを扱ってはいるが、#MeToo運動のような告発調のものではない。そのことは展覧会のタイトル「Quiet Dialogue」からも明らかだ。けれども#MeToo運動によって、長いことセクハラに泣き寝入りしていた人々の存在が明らかになったように、本展でもさまざまな「インビジブルな存在」が可視化されようとしている。本間メイは平塚らいてうの「原始、女性は太陽であった」という有名な言葉を映像作品の冒頭と末尾に引用しつつ、その「日の出ずる国」の女子たちが、平塚らの女性解放運動と時を同じくして東南アジアに「からゆきさん」として身を売りに行っていた事実を、インドネシア側の視点から明らかにする。また良知暁は市川房枝らによる映画『婦人参政権獲得の重要なシーンにおいて、主役であるはずの市川よりもむしろ、その連絡を市川に取り次ぐ電話交換手の女性のほうに目を向ける。他にも、ロシアの地下鉄の監視員だったり（カタリナ・グルツェイ）、養蚕の作業の中での役割だったり（セナ・バショズ）、魔女であったり（坂本夏海）、ここで扱われているのは見えない存在というよりも、見えているけれども人々の間で意識化されずにいる存在を、はっきりと私たちの前に差し出そうとする試みということができるだろう。それは告発というより、問題をと

もに考えていこうと促す問いかけである。

その「問いかけ」としていちばん私に突き刺さったのが川村麻純の作品である。家の中の何気ない片隅（ただし人物は登場しない）や、朗読する若い女性の姿（ただし表情は写さない）の映像とともに、明るく健康的な理想の家庭生活はどうやったら実現できるかが、淡々と語られていく。家族の団欒、家事の分担など、いかにもまっとうな理想論が語られているように思いつつ、それでもしばらく聞き続けていると、だんだん違和感がこみあげてくる。ときどき相反する価値観が語られていることに気づかされるのだ。そして「民主的な生活」といった時代があった言葉を手掛かりに、ここで語られているのが、さまざまな時代における女子向けの「家庭科」の教科書の内容であることに思い至るのである。それら複数のテキストは、語りがあまりに機械的で平板なので、最初は別々のものであるようには聞こえない。しかし気づいたときの気持ち悪さは相当なものだ。それぞれのテキストは、それぞれの「家庭の幸福」を目指している。そしてそのために、女性にある役割を強いている。それはときにきわめて暴力的に聞こえる。しかし翻っていま私たちが理想の家庭のためにすべきことと思いつていることはどうだろう、それは誰かを抑圧してはいないだろうか。そんな内省へと、この映像作品は静かに私たちを導いてくれる。「Quiet Dialogue」はこうした問いをきっかけに生まれるだろう。

展覧会場の中央にはジェンダーをめぐるさまざまな本を読めるミニ図書室が仮設されていた。それぞれの作品を見て気づいたこと、感じたことから、もう一步思考を深めるために設けられたのだという。たっぷり時間をかけて見たい展覧会だった。

複数形の世界のはじまりに

At the beginning of the plural world

会場

ギャラリーB

—

グループ名

複数形の世界のはじまりに

グループの公式サイト：<http://pluralworld.work>

—

出品作家

横谷奈歩 / 船木美佳 / さくまはな / 井上明彦 /

小野環 / 服部志帆

—

入場者数

6,416名

—

助成：公益財団法人 野村財団、公益財団法人 朝日新聞文化財団

アート内外の世界を往還しながら「複数形の世界」というテーマで活動を展開。日常の些細な出来事に対するアンテナを張りつつ、5億年前の大地、古代の風景、アフリカの森の民、シャーマンの子守唄、台湾の離島、そして近代国家の成立へと思いを馳せる。全国各地の活動拠点を起点にフィールドワークを重ね、「アートを介して現代社会で軽やかに生き延びる方法」を模索している。



グループによる展覧会紹介

アーティストは想像力によって、未だ言葉になっていないミッシングリンクを探し求め、世界を物語として把握する。アーティストが創り出す「物語」を一つの柔らかな球体と仮定すると、異なる領域の他者との対話はその球体に風穴が開くきっかけとして捉えることができる。

風穴から、冷たい風が吹き込む日もあれば、細く長い光が差す日もあり、聞き慣れない生物の鳴く声が聴こえる日もあるだろう。球体の内外をめぐる対話は世界の秩序の再編を促し、複数形の世界が生成される契機となる。

展覧会「複数形の世界のはじまりに」では、ギャラリーBの展示空間中央に京都崇仁地区の高瀬川上に設置されたものと同サイズかつ同方向のテラスを設置。そのテラスを起点に、各地の活動拠点から集まったアーティストによる作品やイメージが有機的に関係しつつ存在する「集落」的世界をポリフォニックに展開した。また同時開催のイベント「集落会議」において、“複数形の”世界に対する新たな視座を生み出すことを試みた。

協力：荒川佳大、飯塚雅未、石川実香、岡田和枝、韓河羅、クリスティーン・ブレ&花澤洋太、小山穂太郎、西尾佳那、道間桃子、村中祐仁、森下千恵



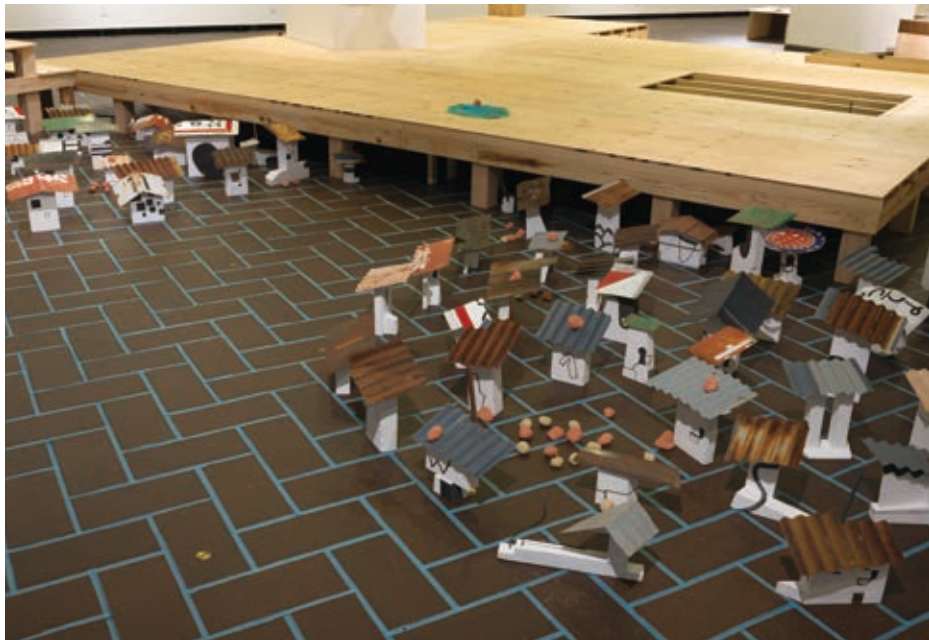
複数形の世界のはじまりに《上野テラス》



船木美佳《おならのような話が増える山》



小野環《粘土遊び》



井上明彦《バラ邑》《ときの河原》



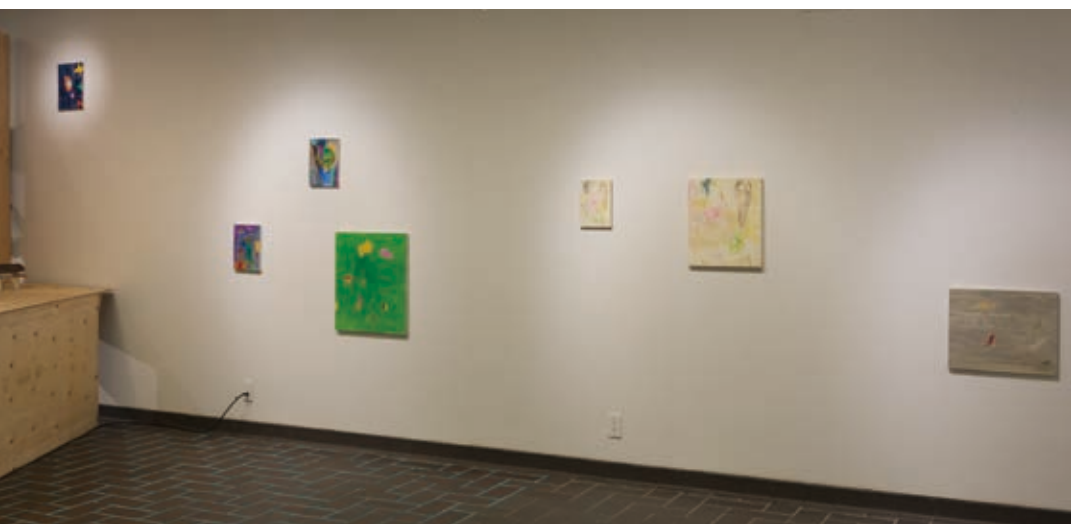
服部志帆+横谷奈歩《カラス会議》

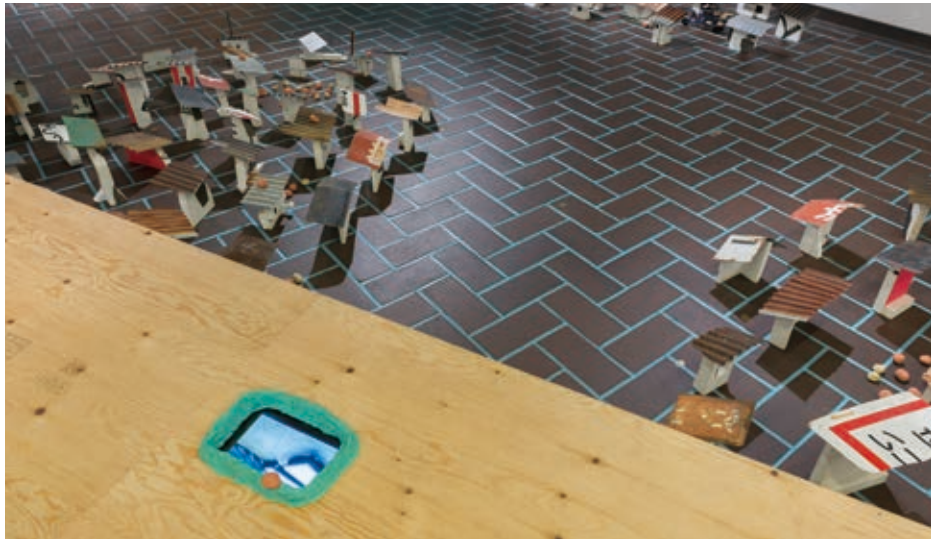


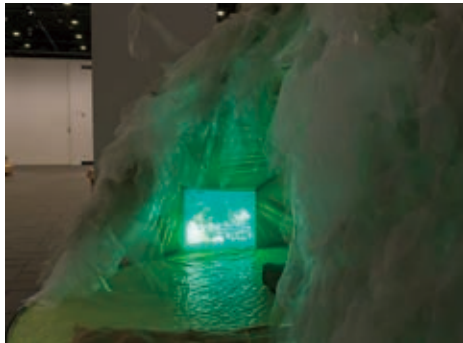
さくまはな 《Society》



左：川田順造《集落会議のための参考図書・その他資料》
 右：塩見允枝子《無限の箱から—集落会議のために2018》





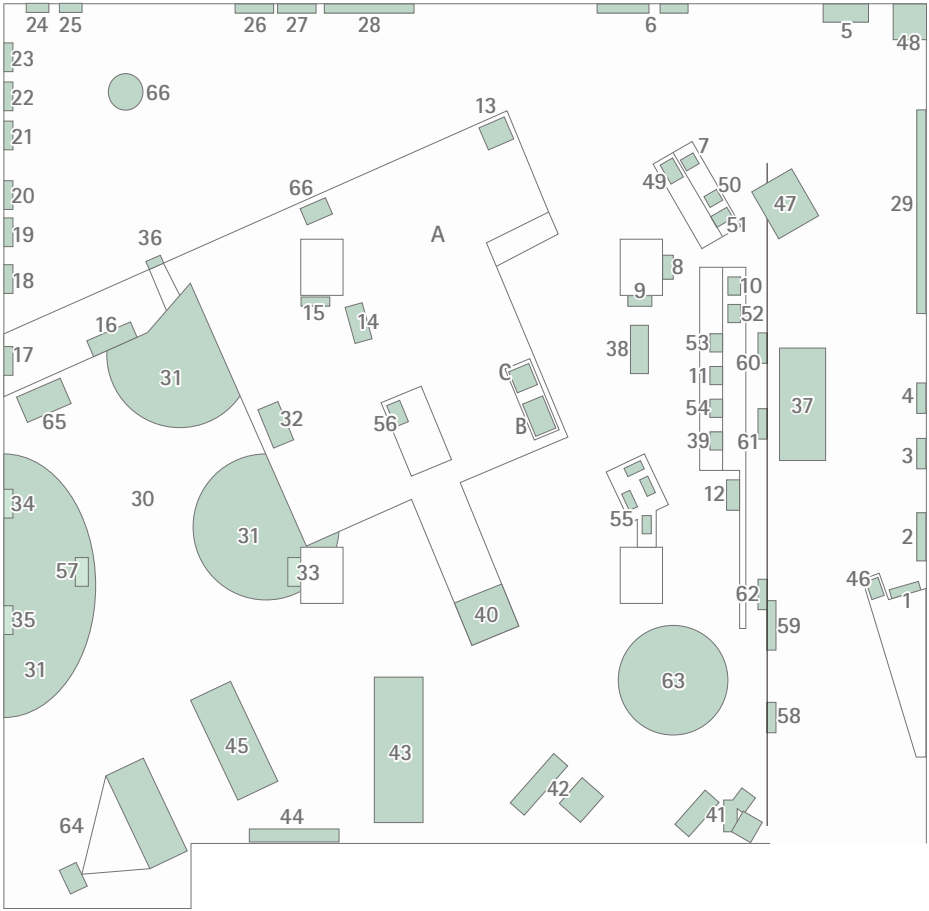


作品リスト

番号	作家	作品名	材質・素材など	制作年
1	船木美佳	凧	和紙・水彩	2018
2	船木美佳	親鸞ぼこぼこ双六	和紙・墨	2018
3	船木美佳	双子に黄金のスープを渡す 高貴な人	木パネル・油彩	2016
4	船木美佳	錬金術の壺	木パネル・油彩	2015
5	船木美佳	二者選択を迫らない親鸞	紙粘土・木	2018
6	船木美佳	おならのような話が増える山	和紙・墨	2018
7	船木美佳	集落会議 語る人の衣装	段ボール・ビーズ・毛糸	2018
8	船木美佳	中世演劇より	ミューズ紙・墨	2018
9	船木美佳	学習意欲	ケント紙・ペン・色鉛筆	2018
10	船木美佳	集落会議 聴く人の帽子	布・毛糸	2018
11	船木美佳	ぼこぼこ	粘土	2017
12	船木美佳	おならのような話が増える山	和紙・墨	2018
13	船木美佳	一千一秒物語	本	2017
14	船木美佳	おならのような話が増える山	布	2018
15	船木美佳	おならのような話が増える山 解説図	和紙・墨	2018
16	船木美佳	オバケ オバケ オバケ	キャンバス・油彩	2012
17	船木美佳	お多福と北海道 5月	木パネル・油彩	2018
18	船木美佳	ナスと仮面男	木パネル・油彩	2018
19	船木美佳	お花	木パネル・油彩	2013
20	船木美佳	緑の部屋	キャンバス・油彩	2016
21	船木美佳	少女の幽霊 1	キャンバス・油彩	2017
22	船木美佳	少女の幽霊 2	木パネル・油彩	2017
23	船木美佳	女 レモン	キャンバス・油彩	2017
24, 25	船木美佳	黄色の人が寝ている 1	木パネル・油彩	2017
26	船木美佳	集落の森	木炭紙・木炭	2018
27	船木美佳	凧	和紙・水彩	2018
28	船木美佳	親鸞ぼこぼこスケッチ	和紙・墨	2018
29	井上明彦	パラ ^{らん} 邑古絵図	アクリル、顔料、色鉛筆、布	2018
30	井上明彦	ときの河原	マスキングテープ、珪器質タイル床	2018
31	井上明彦	パラ邑	廃材（トタン、鉄、木材等）、土顔 料（ティエベレ／ブルキナファソ）、 膠、ジェッソほか	2013-2018
32	井上明彦	パラ河	映像（5'24"）、粘土	2018
33	井上明彦	蘭嶼四景：核廃棄物貯蔵施設道路	写真（インクジェットプリント）	2018
34	井上明彦	蘭嶼四景：タオ族地下屋	写真（インクジェットプリント）	2018
35	井上明彦	蘭嶼四景：海辺の教会	写真（インクジェットプリント）	2018
36	井上明彦	蘭嶼四景：海辺の民芸店	写真（インクジェットプリント）	2018

番号	作家	作品名	材質・素材など	制作年
37	小野環	再編／整頓／混沌	書籍『原色日本の美術〈31〉近代の洋画』、接着剤、展示ケース	2015-2018
38	小野環	再編	書籍『日本の美術〈第25〉世界の 中の日本美術』、『世界名画全集〈第 25巻〉今日の世界絵画』、接着剤、 引き出し、ガラス	2016
39	小野環	読みの違い	書籍『日本の画家ー近代洋画ー（カ ラーブックス270）』2冊、接着剤、 引き出し、アクリル板	2018
40	小野環	粘土還り	油粘土、書籍『原色日本の美術〈28〉 近代の建築・彫刻・工芸』、構造用 合板、ターンテーブル	2018
41	小野環	粘土還り	油粘土、書籍『岡山の彫像（岡山文 庫（138）』、電球、構造用合板ほか	2018
42	小野環	粘土還り	油粘土、地球儀、構造用合板	2018
43	小野環	粘土還り	油粘土、書籍『原色日本の美術〈28〉 近代の建築・彫刻・工芸』、電球、 構造用合板、ターンテーブル	2018
44	小野環	粘土還り	油粘土、アクリル絵具、鉛筆、アク リル板、ペニア	2018
45	小野環	公団住宅	百科事典、接着剤	2018
46~57	さくまはな	Society	木、クレイ、アクリル絵具	2018
58	横谷奈歩	粘菌集落	図譜、鉛筆、水彩	2018
59	横谷奈歩	終の住処Ⅲ	図譜、鉛筆、水彩	2018
60	横谷奈歩	溶けるベッド	ゼラチンシルバープリント	2008
61	横谷奈歩	いぼのある部屋	ゼラチンシルバープリント	2008
62	横谷奈歩	山	ゼラチンシルバープリント	2008
63	服部志帆+横谷奈歩	夜の森で	カメルーンの森で写真撮影と夜の 森の録音、テキスト：服部志帆／ 映像インスタレーション（写真を 元に構成した映像+テント、布）： 横谷奈歩（映像：9'00"）	2018
64	服部志帆+横谷奈歩	春の夢	テキスト：服部志帆／映像インス タレーション：横谷奈歩（映像： 10'00" + ワンピース、造花、砂）	2018
65	服部志帆+横谷奈歩	カラス会議	テキスト：服部志帆／インステ レーション（本、布による立体）：横 谷奈歩／音声協力：守章（音声：5'00"）	2018
66	服部志帆+横谷奈歩	人魚と猟師	テキスト：服部志帆／インステ レーション（本、ジオラマ、双眼鏡）： 横谷奈歩	2018
A	複数形の世界のはじ まりに	上野テラス	構造用合板、アクリル板	2018
B	川田順造	集落会議のための参考図書・その 他資料	川田順造氏より寄贈された47点の本 などの文章資料（紙）	2018
C	塩見允枝子	無限の箱からー集落会議のために 2018	〔集落会議〕のために書かれた指示 書（紙）、箱（紙）	2018

作品配置図



アーティストトーク

日時：6月9日(土) 15時00分～16時15分
場所：ギャラリーB 参加者数：40名



*

集落会議 ② 順造さんと、集落について考える。 (ゲスト：川田順造氏)

日時：6月23日(土) 14時10分～16時15分
場所：ギャラリーB 参加者数：35名



*

集落会議 ④ 魔王と魔女のお悩み相談 (ゲスト：OJUN氏・白井美穂氏)

日時：6月30日(土) 15時00分～17時00分
場所：ギャラリーB 参加者数：50名



*

内容：「集落会議」は、ギャラリーBの展示空間「集落」に様々な道の達人を招き、彼らの叡智を共有しながら、本展参加アーティストとともに、この世界の様々な問題について対話をおこなう試みである。本展会期中の集落会議として、小倉正史氏(美術評論家)、川田順造氏(人類学者)、佐久間新氏(舞踊家)、OJUN氏、白井美穂氏(美術家)、塩見允枝子氏(音楽家)とともに、対話やワークショップ、公演を行った。

集落会議 ① 長老と、美術について考える。 (ゲスト：小倉正史氏)

日時：6月10日(日) 11時00分～12時30分
場所：ギャラリーB 参加者数：7名



*

集落会議 ③ ワークショップ・複数形の散歩 (ゲスト：佐久間新氏)

日時：6月29日(金) 17時00分～18時30分
場所：ギャラリーB及び上野公園 参加者数：15名



*

集落会議 ⑤ 塩見允枝子「無限の箱から— 集落会議のために 2018」

Mieko Shiomi, From Endless Box — for Tokyo Village Meeting 2018

日時：7月1日(日) 10時00分～11時00分
場所：ギャラリーB 参加者数：45名



*

「複数形の世界のはじまりに」展がもたらしたこと

野地耕一郎(泉屋博古館分館長)

混沌の風穴一。ギャラリーBに足を踏み入れた時の最初のイメージがこれだ。だが、6人の作家たち個々の意図と方法や相互に交差する形式の必然性が解りはじめると、そこにひたひたと押し寄せてきたのは、「社会」と「美術」、「現実」と「虚構」の境界を横断することによる新たな芸術表現の可能性だった。そして、従来の関係性の解体と既成概念の転覆による未知の領域を開拓しようとする試み。

例えば、本という内部に記述された物語が不可抗力による変容によって却ってその本質を顕現している船木美佳の作品《一千一秒物語》のように内部と外部の境界を溶解させ、その区別を曖昧にさせる点においては、二次平面にへばりついた立体画像を三次元に戻す小野環の《再編》や《読みの違い》もまた、造形概念性に疑義を挟み込む。また、1975年当時の東京都美術館を回想させる《粘土還り》と題された模型は、当時を知る私などには旧懐の念を覚えさせるものだったが、建築もまた新陳代謝するものだという偶然と必然の歴史性を思わせる。

建築だけではない、社会もまた新陳代謝する。井上明彦が提示した《上野テラス》は、京都崇仁地区を流れる高瀬川に彼が設置した「崇仁テラス」と同サイズ、同方位で平行移動した状態で造作されたもの。崇仁地区は且つて被差別地域として知られるゾーンだが、現在は都市開発の一環として様々な人々が交流する。この上野テラスの高さは、上野公園広場の噴水のあるテラスの高さに設定されている。この噴水のある場所は幕末まで寛永寺本堂があった場所。

噴水池は、東京国立博物館本館前の池と地下でつながっていて、その昔その水は小川となって都美の前身である旧東京府美術館の脇を通り、東京藝大と動物園の境にある崖を流れ落ちていた(現在は暗渠)。官展の落選者は、その小川に悔し涙を流したという。と、そんな歴史や記憶という複数形の物語を、この漂流するテラスは時空を超えて喚起する装置というわけだ。それは人をうっとりさせるような造形という類のものではないが、記憶と体験の基層をゆるやかに刺激するメディアといえるかもしれない。

そんなメディアが有機的に関係し合う場を作家たちは「粘菌集落」と呼ぶ。社会や土地に隠された事象を掬い取って、人為と自然の逆説的視角を提示する服部志帆と横谷奈歩のコラボ作品の不思議なリアルさは、現実の内側にいるのか外側にいるのか分らないような距離感や温度を持っている。彼女たちの作品たちは、それを見ることによって視覚とは別の何かが駆動される感じなのだ。自分の中にある自分以前の何かが動き出す感じといえよだろうか。それが例えば何かの拍子に自分が抱いた不条理を、現実的ではない形体として造形し直すさくまはなのキノコ屋台とも癒合している。

この粘菌集落は、日常的な知覚と認識の枠組をどこかで狂わされてしまうような緩衝地帯のようにも思えた。これもまた現代の美術のひとつの形として多くの人々に触れ得てもらえたとしたら、都美セレクトショングループ展の意義も高まるはずである。会期中のイベント「集落会議」がもっと頻繁にあれば、さらによかった。

蝶の羽ばたき 時差 vol.3

Time Difference 時差 vol.3

New York-Seattle-London-Tokyo

Butterfly Flutter - Time Difference 時差 vol.3
New York-Seattle-London-Tokyo

会場

ギャラリーC

—

グループ名

ART BEASTIES

グループの公式サイト：<http://artbeasties.com/>

—

出品作家

曳野真帆 / Ko Irkt / 中村ユキ / Paul Komada /

Takayuki Matsuo / Tokio Kuniyoshi / 北村早紀 / 浅井翔 /

中山誠弥 / 山本純子

—

入場者数

9,627名

—

助成：公益財団法人 朝日新聞文化財団 独立行政法人 日本芸術文化振興基金

NY・シアトル・ロンドン・東京・神戸の5都市から集まった、アーティストコレクティブ。「日本人によるコンテンポラリーアート」を世界により強くアピールすることを目的に、2013年NYで設立し、国内外を問わず展示を重ねてきた。アートを問い続ける有志が繋がり、真摯に作品と向き合う、そのプロセスに生まれる共鳴とズレこそが、新たな視点と表現を生むものと考え、活動が続けていく。



グループによる展覧会紹介

「時差展」は、ART BEASTIESの活動の中で感じた「時差」への実体験から生まれた企画である。現代に必要なオンラインコミュニケーション：瞬間的・同時代的な世界との繋がりは、時に私たちの「差」を露呈させ、孤独や危機感、自己のあり方を強く認識させることもあるだろう。

異なるタイムゾーンに暮らす私たちのリアルな葛藤や共鳴、そのプロセスの全てにある、新たな視点・表現を探るものである。

本展に向けての作品制作のプロセス自体も大切な要素と捉え、プランやコンセプト作りの段階からメンバー間で共有・討論・記録をしながら、会場に合わせた計14点の新作を制作。実験的なファインアート作品、サイトスペシフィックなインスタレーション、鑑賞者参加型

のコラボレーションワーク、即興的パフォーマンス等のジャンルを超えた作品群と、これらの作品制作のあらゆるプロセスの記録を展示した。

本展は、ART BEASTIESを東京で紹介する初の展覧会であった。

「時差」というテーマは、時刻の違いにみるように、相手や世界との様々な・絶対的な「差」を真摯に見つめること、互いに問い続けること、自分自身を捉え直すこと、それらへの革新的な期待を込めるものである。来場者の方々はもちろん、それ以上に私たちが予想もし得ないような、世界に対しての対話を試みた。蝶が羽ばたく程度の小さな攪乱であっても、その繋がりは場所を越え、思いもよらない影響を与えうるといふ、刺激的な未来を私たちは予見する。





Ko Irkt 《無題》



北村早紀 《昨日と向こうのあいだに》



曳野真帆 《不在が存在する》 撮影：曳野真帆



山本純子 《Atmospheric Consciousness: 意識の狭間》



Paul Komada 左：《Tender Calder》 右：《A Glimpse Into Other World : Diptych》



Tokio Kuniyoshi 《Jackpot》



Takayuki Matsuo 《ある地点》



中山誠弥 《指先から世界を》

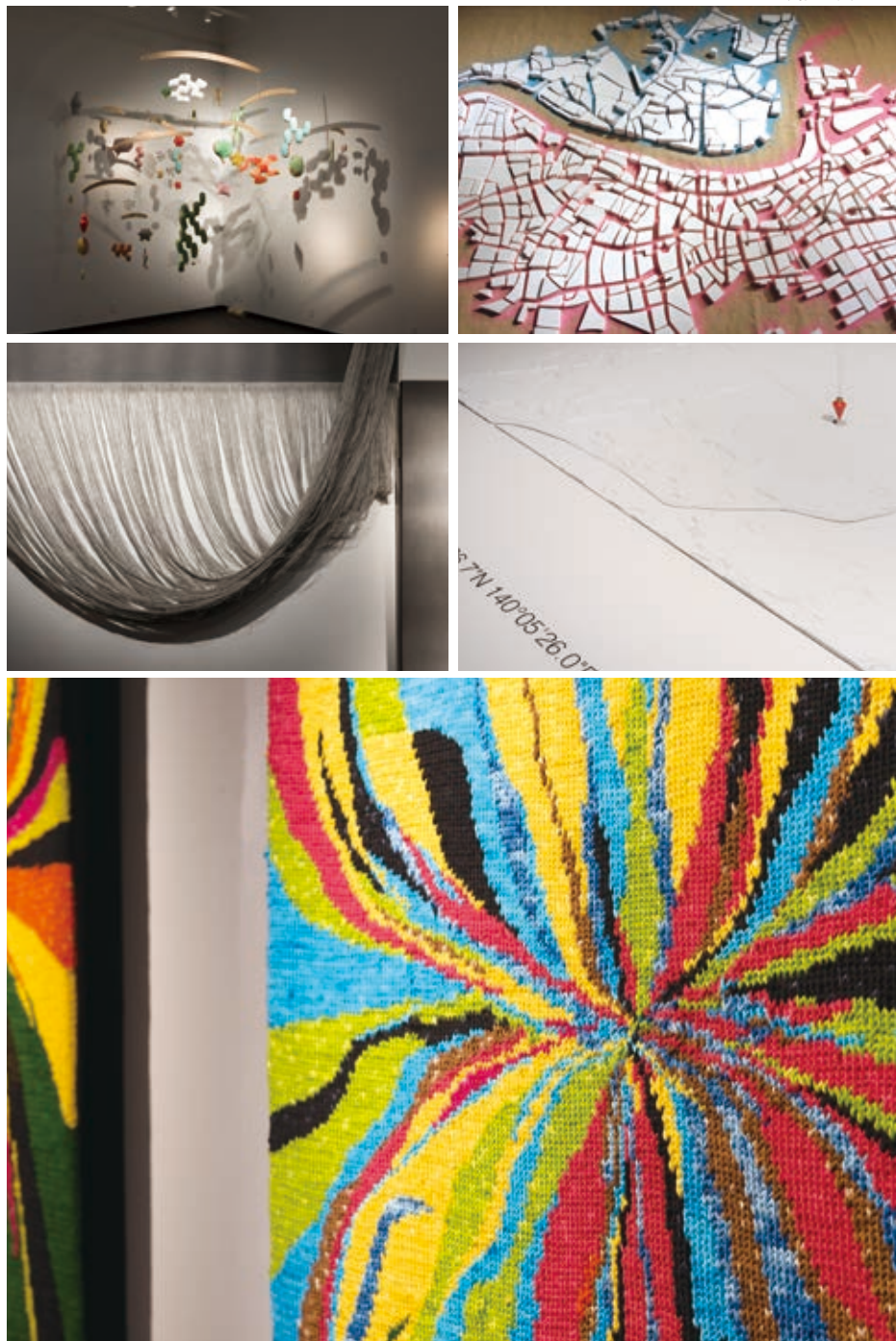


浅井翔《40日間の堆積》



中村ユキ《街を読む》 撮影：中村ユキ

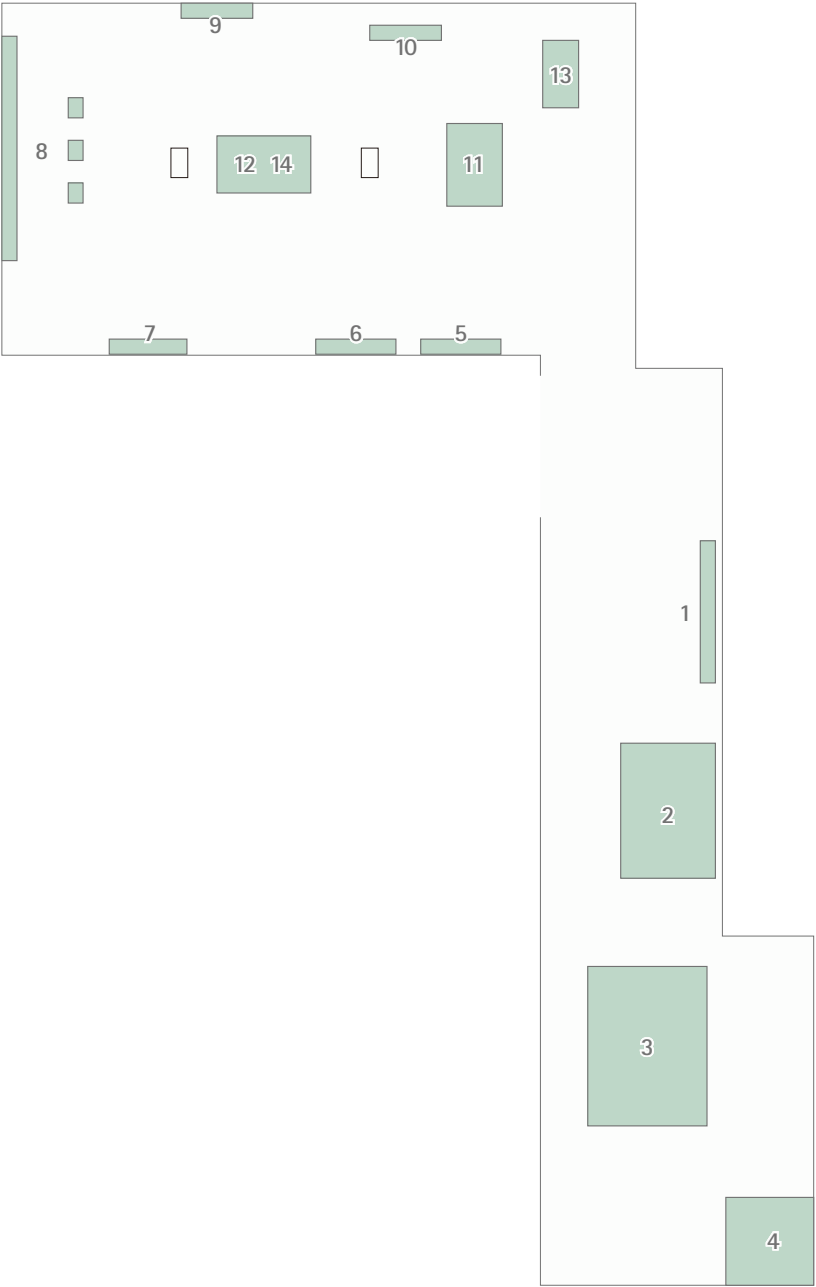




作品リスト

番号	作家	作品名	材質・素材など	制作年
1	Ko Irkt	無題	カンヴァス、チャコール、 アクリル	2018
2	曳野真帆	不在が存在する	椅子、風船、スピーカ、 カーリングリボン、ボンド、 プロジェクタ	2018
3	北村早紀	昨日と向こうのあいだに	木版、新鳥の子紙	2018
4	山本純子	Atmospheric Consciousness:意識の 狭間	コットン、木製アーム、テグス、 ナイロンファイバー	2018
5	Paul Komada	Tender Calder	布、スピーカ	2018
6	Paul Komada	A Glimpse Into Other World : Diptych	ニッティング、カンヴァス	2018
7	Takayuki Matsuo	ある地点	紙（等高線模型）、写真（アルミ プレート加工）、プロジェクタ	2018
8	Tokio Kuniyoshi	Jackpot	スライドプロジェクタ	2018
9	中山誠弥	指先から世界を	紙、鉛筆、ペン、ジェルメディ ウム、カンヴァス	2018
10	浅井翔	40日間の堆積	アクリル絵の具、紙、革、糸、 布、鉛筆	2018
11	中村ユキ	街を読む	石膏、砂	2018
12	ART BEASTIES (グループ作品)	Meeting Table	テーブル、椅子、プロジェクタ、 ラップトップ、イヤホン、紙、 iMac	2018
13	ART BEASTIES (グループ作品)	Perpetual Meeting	制作中のデブリ、メモ、コップ、 カップラーメンの空き容器、 やかん など	2018
14	ART BEASTIES (グループ作品)	無題	紙、レーザープリンタ、iPad	2018

作品配置図



アーティストトーク&パフォーマンス

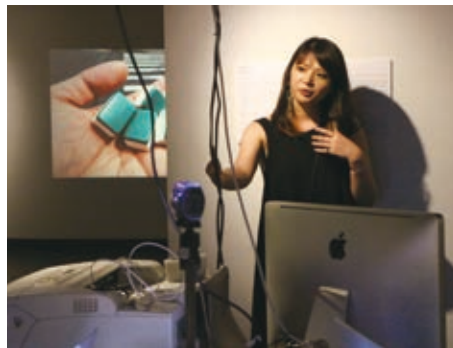
日時： 6月9日(土)14時00分～15時00分 場所：ギャラリーC

参加者数： 38名

内容： 本展参加アーティスト10名と、来場者の方を交えたオンラインミーティング形式のアーティストトーク。会場内には11台のラップトップを設置、NYからスカイプにてアーティスト2名も参加した。来場者の皆様からの質問を受け付けながら、会話形式で進行した。
ネットワーク不良や機械の不調、時間的な制限など、私たちのリアルなコミュニケーションのエラーやハプニングも含めた即興的なパフォーマンス。



*



*



*

彷徨う時空への新たな視線

笠嶋忠幸（出光美術館学芸課長）

移りゆく日常の事象を、純粹かつ繊細な眼差しで見つめつづけるグループ、ART BEASTIES。

生い立ち、生き方、志向、いずれにおいても異なる価値観をもつ彼らが、互いに結びついてきた要因は、今の自分と真剣に向き合おうとする姿勢の一事に尽きる。代表をつとめる曳野真帆が制作のテーマに掲げたのは、何者か分からぬ色無き自分の存在だ。昨今の生活空間を豊かに彩るさまざまな情報機器。必要不可欠となったメディアと人との関わりがカオス化し、感じ得なくなってきた人の存在の空虚感。それは、空気そのものではないか？あるいは生命でさえ、その存在をも空気と同等に捉えられてしまう彼女の冷静な視線が、白い風船、過去の映像、そしてぼつんと置かれた一つの椅子によって表現され、鑑賞者にも同じ思索を呼びかけた。一般に、人は各々の個性を保持しながら成長する存在ではあるが、その事を手放しに多様という言葉だけで受け止めるのは、やや躊躇せざるをえない。もしそうした理解の連鎖と連続とが、希薄な誤解の重なりだとしたなら・・・そんな素朴な問いを投げかけた北村早紀の展示は白い立体と木版摺りの記憶で成り立つ。こうした二人の、いわば幻想的な展示空間は、若々しい感性を直截的に示していて、どこかしら人が体内にそっと囲っている透明さを物語っていた。

これと対照的であったのは、人の血肉に及ぶストレートな主張、Ko Irkt、Paul

Komadaの作品であった。北村とも通じる点はあるが、バタフライ効果を核として思考を展開させた、「思考する人の結果」として示す彼らの作品には、時差というより、時空の捻れに近いイメージ空間があった。もっと高く広大な視野から自身を振り返ろうと試みる中村ユキの作品は、時空の迷い子と化し、その自分を今という時点から抱きしめる。Tokio Kuniyoshiによる何気ない日常の視線を具体化したスライドの連続投影。会場に設置されたプロジェクターが発する「カシャ！カシャ！」音が、時を過去へと誘い、さらに視覚を増幅させていた。この自動操縦の音が紡ぐ「間」の具合こそ、鑑賞者の過去と現在とをつなぎ止めるポイントであったろう。鑑賞者は、この映像を通じて、見知らぬ他者の過去に寄り添いつつ、そこに不連続な自身の記憶をも重ね合わせて心象を完成させる。なんともこの奇妙なまでの時空の歪みが、見る者の体感温度を上げていたのは印象的であった。そして中山誠弥によるスケッチによるコラージュには、無邪気に生きる人の、柔らかな温かみを感じた。巡り連なる人と人。場を超えて、それらが融け合ってゆく時流。人の日常は、不確定なものであっても、やはりそこに存在しているという不可解さも時差であることを教えてくれた1点であった。Takayuki Matsuoの若く純朴な思考や思索も加わって、全体が自然な主張として交錯しつつ、融和ムードの高い、魅力的な展示空間であった。

「都美セクション グループ展 2018」について

—多様な価値観とどう向き合うのか

山村仁志（東京都美術館学芸担当課長）

「ポストモダン」の時代と呼ばれて久しい。現代は、多様な価値観が並存している。のみならず、世界と時代の動向も読みにくくなり、どのような様式が古くてどのような傾向が新しいのか一概に判断しがたくなっている。ある意味、すべての形式が古くて新しい。伝統と革新といった弁証法が通用せず、多様なコンセプトと手法が増えていくだけだ。その多様な価値観に今日どう向き合うのか。今年の「都美セクション グループ展 2018」では、総じて、現代世界の多様な情報環境と価値観に、それぞれの視点と方法で誠実に向き合おうとする各作家の姿勢と静かな苦闘を感じた。

「Quiet Dialogue：インビジブルな存在と私たち」（ギャラリーA）は、いわゆる「フェミニズム・アート」といわれる作品群で、基本的にはリサーチに基づいたストレートな展示だった。中でも、本間メイの映像イン ス タ レ ー シ ョ ン《Anak Anak Negeri Matahari Terbit -日出ずる国の子どもたち-》は、インドネシア青年の視点から見た日本と日本人娼婦の歴史と物語を、説得力のある二面の映像で語っていて秀逸だった。プラムディア・アナンタ・トゥールの小説から取られている語りの字幕も含蓄があり、心に残った。オランダ占領期のインドネシア、アジア、日本人移民を綿密に調査し、それぞれの時代の写真、地図、新聞、雑誌、事物、インタビューなどを織り交ぜて巧みに構成しながら、歴史の中で忘れ去られた女性の存在と孤独を浮き彫りにしていた。

メディアを介して形成された日本の表象と個人の語りが対照され、両者の乖離が明確にされていた。また、他の出品者、例えばカタリナ・グルツェイによる地下鉄勤務の女性写真、セナ・バンショズによる養蚕農家の映像《Time Worm》も現実を見つめる厳しく美しいもので、断片的に見ていても楽しめるものだった。小口なおみと滝朝子の構成したライブラリースペースは、膨大で多様な情報の中で曖昧になりがちな事実を確認するには辛抱強い検証しかない、という事実を再確認させる場所となっていた。

「複数形の世界のはじまりに」（ギャラリーB）は、展示空間を一つのジオラマ集落と見立て、各作家の作品が大小入り組んで構成され、複雑かつダイナミックなエネルギーを醸し出していた。井上明彦が設営した《上野テラス》は場全体の変容を促す効果をあげていて、見るもののスケール感を混乱させ、《パラ邑》と呼ばれる集落と《ときの河原》と呼ばれるマスキングテープの小川に不可思議な現実感を与えていた。小野環の《公団住宅》とさくまはなのキノコ屋台は、《上野テラス》と呼応しながら別の縮小世界の存在感を放っていた。とくに小野の青い粘土による様々な大きさの球体は、地球や天体を意識させるものであり、さらに場所のスケール感を大きくする効果を発揮していた。横谷奈歩と文化人類学者の服部志帆が作るインスタレーションは、映像も合わせて、世界各地で採集した事実とフィクションがないまぜになって奇妙なリアリティを獲得

していた。《カラス会議》のカラスはシンプルなオブジェだがまるで生きているようで、子どもたちがびっくりしていた。最も多くの作品を出品した船木美佳は、油彩、水彩、ドローイング、オブジェ、衣装、帽子、本など様々な素材と技法を駆使しながら、ユーモアと脱力感と鋭敏な色彩感覚に溢れた作品を展示空間に散りばめていて、全体を緩やかに調整し関連付けていた。このグループの作家たちは、展示作品と様々なイベントを通じてお互いに干渉し合い、何が事実で何が虚構（フィクション）なのかが必ずしも明らかではなく、全体に不分明な雰囲気包まれていて、まさに私たちが「複数形の世界」に囲まれているというリアリティを醸し出していた。

「蝶の羽ばたき Time Difference 時差 vol.3 New York-Seattle-London-Tokyo」（ギャラリーC）は、ニューヨーク、シアトル、ロンドン、東京に在住している日本人作家がネットを通して（例えばスカイプ会議によるミーティング・テーブル）ゆるやかなグループを作り、各地で展覧会を行っている。これは、ネット時代のグループ展として新しい可能性を示唆するものである。「時差」をテーマとした企画展の第1回は、2015年にシアトルのSOILギャラリーで開催され、第2回は2016年に兵庫県立美術館ギャラリー棟で開催されて、今回の都美での展示は3回目である。展示のタイトル「蝶の羽ばたき」（いわゆるバタフライ効果）とは、カオス理論でいう予測困難性を表す寓意的な表現であ

る。例えばブラジルの一羽の蝶の羽ばたきが、テキサスで竜巻を引き起こすかもしれない。両者の因果関係は確かに存在するが、その関係は無数の重層性を経ていて決して見通せないのである。各作家の作品は確かに現代美術に一石を投じるものであるが、その状況を私たちが見通すには複雑に過ぎる。これも、現代のポストモダンの状況と深い連関があるだろう。10人の作家の作品が出品されたが、私としては中山誠弥の大きなドローイング《指先から世界を》と山本純子のモビール《意識の狭間》が印象に残った。両者とも手作りで古風ともいえる作風だが、デジタル時代の微妙な「時差」や「羽ばたき」を実感できるのは、逆説的に私たちの五感であり、身体であろう。

多様な価値観とどう向き合うのか。今回は22日間の会期があり、比較的じっくりと3つの展覧会を見ることができた。何度もギャラリーで見ていて意識したのは、一般の来館者がどう感じ、どう思ったのかということだった。確かに一人ひとりの鑑賞者の印象や感想を心配していたら切りがない。アンケートを見ても、絶賛する人がいる一方で、良くないと感じる人もいる。肯定的な意見があれば否定的な意見もある。であればこそ、お互いの価値観に対して一つひとつ冷静かつ寛容に接すること。それこそが現代の課題というものだろう。ポストモダンの社会において、学芸員もそれぞれの視点と方法で真摯に時代と向き合わねばならないと改めて思った次第である。

展覧会実績

都美セレクション グループ展 2018
 Group Show of Contemporary Artists 2018

会期： 2018年6月9日（土）—7月1日（日） 22日間
 Period： June 9 (Sat) – July 1 (Sun), 2018
 会場： 東京都美術館 ギャラリー A、B、C
 Venue： Gallery A, B, C
 主催： 東京都美術館（公益財団法人東京都歴史文化財団）、
 各展覧会の実施グループ
 Organized by Tokyo Metropolitan Art Museum
 (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture),
 Executive committee

総入場者数： 22,701人

公募期間： 2017年3月27日—7月7日
 応募件数： 34件
 審査委員： 大谷省吾（東京国立近代美術館美術課長）
 笠嶋忠幸（出光美術館学芸課長）
 野地耕一郎（泉屋博古館分館長）
 南雄介（愛知県美術館館長）
 山村仁志（東京都美術館学芸担当課長）

担当： 田中宏子、田村麗恵、平方正昭（東京都美術館学芸員）

主な掲載記事

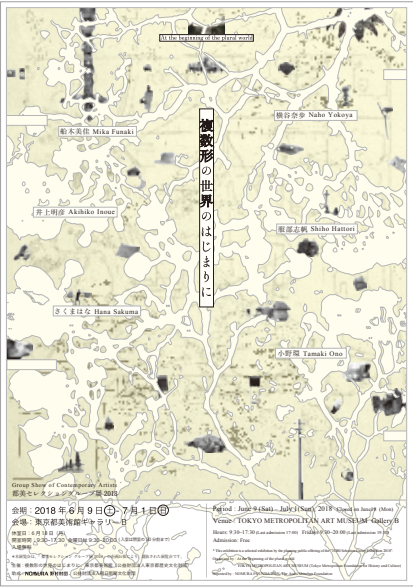
『『Quiet Dialogue: インビジブルな存在と私たち』展覧会取材と出品作家：本間メイ、イルワン・アーメット、ティタ・サリナへの取材』『NHK WORLD-JAPAN』（NHK 国際放送）2018年7月4日
 小倉正史「小倉正史の現代美術講座…その63 『複数形の世界のはじまりに』『月刊ギャラリー』2018年8月号
 村田真「都美セレクション グループ展 2018 複数形の世界のはじまりに」『artscape』レビュー 2018年8月1日
 高嶋慈「都美セレクション グループ展 2018 Quiet Dialogue: インビジブルな存在と私たち」『artscape』レビュー 2018年7月15日



グループ作成チラシ



ギャラリー A
 Quiet Dialogue：インビジブルな存在と私たち



ギャラリー B
 複数形の世界のはじまりに



ギャラリー C
 蝶の羽ばたき Time Difference 時差 vol.3
 New York-Seattle-London-Tokyo

都美セレクション グループ展 2018 記録集

編集： 東京都美術館 田中宏子、田村麗恵、平方正昭

写真撮影：坂田峰夫（＊印および特に明記のあるものを除く）

デザイン：佐伯亮介

印刷： 株式会社サンエムカラー

発行： 東京都美術館（公益財団法人東京都歴史文化財団）

〒110-0007 東京都台東区上野公園8-36

Tel.03-3823-6921

発行日： 2019年3月15日

©2019 Tokyo Metropolitan Art Museum

Printed in Japan